

# 飛耳長目

通巻194号 令和2年1月1日発行

「開頭」80号

昭和29年9月1日発行

夏季研修大会報告号八・九月合併増大号

## 二宮尊徳と毛沢東

森信三

1

生まれてから今日に至るまでの長い間に、私の影響を受けた人々の数は非常にたくさん数えることができる。しかしそれらの人々のうちで、二宮尊徳と毛沢東とから受けたものは、私にとって一種言うべからざる感銘だと言ってよい。こういうと多くの人は……「二宮尊徳と毛沢東？それはまたなんとという奇妙なコントラストではないか」と訝られる怒られることであろう。そのことの分からぬ私でもないが、しかし常に生命の実感と感動とに生きている私にとっては、どうしてもこれは否定することのできないことなのである。

私が初めて二宮尊徳の偉大さを知ったのは、忘れもせぬ数え年33歳の年のことであった。当時私は大阪の天王寺師範の専攻科で哲学や倫理を教えていた。その時、卒業生の一人である山本正雄君が春休みを利用して、二宮尊徳の遺跡巡りを

し、その土産として「報徳記」と「二宮翁夜話」とを求めて来てくれた。「報徳記」と「夜話」とは、その後数年してからは岩波文庫にも取り入れられて、非常に手軽に入手できるようになったが、当時としては全然入手は困難であった。それは小田原の「報徳文庫」で刊行したたのホヤホヤのもので、薄水色の四六版の瀟洒な本であった。

私はその後25年も経過している今日でも、これらの二書を初めて読んだあの時の感慨を忘れることができない。まったくそれは感動の無限連続とも言うべきものであった。それまでの私は、それほどまでに深く心を打たれた書物を知らなかった。特に「夜話」の巻頭劈頭の「すべからく天地不書の経文を料すべし。」と云い、真理を書物の上に求めんとする学者輩の言説は取らざるなり云々と記されている言葉は、それまで大学のアカデミズムの中にありつつ、どこかにそぐわぬものを感じていた私にとっては、全く「開眼」の役目を果たしてくれと言って良い。その後今日に至るまでの私の歩みには、全くこの「夜話」の開巻劈頭の一句によって定められたと言ってよい。

と検索 教授録 修身先生と 森信三 ネットで

行発日1月2年令和4号19巻通  
その後の私のアンチ・アカデミズムと  
いべき学問の歩みは、実にここにその  
分岐点があるのであり、同時に私のその  
後の学界的に不遇の基づくところも、全  
くここにあると言つてよいであろう。す  
なわち私は、私の学問の根本的な立場と  
もいべき「真理は現実の只中に在り」  
という事を、その時尊徳翁の「夜話」に  
よつて教えられたのである。

## 2

くもくようちひじち長耳飛  
しかるにそれから約25年の歳月を隔て  
て、昨年あたりから、私は毛沢東の書物  
をぼつぼつと読み始めていたのであるが、  
そこで実に不思議な、全く予期しなかつ  
た一つの感慨を得つつある。それは毛沢  
東を読んでみると、何故かは知らぬが、  
そこに私にはそのかみ25年前に二宮尊徳  
のものを読むことによつて得た感動と一  
脈相通するものが感取せられることであ  
る。だがこれは初めてこの一文を読まれ  
る誌友にとつては、意外千万な言葉であ  
り、摩訶不思議であるう事はもとよりの  
こと、当の私自身にとつても、全く予期  
せざりしことである。

だが事実はどこまでも事実であり、私

はそれを隠すわけに行かない。そもそも  
二宮尊徳と毛沢東では、誰が考えてみて  
も、その違いがあまりにもひどすぎるゆ  
え、多くの人は私がこういうの聞いて唾  
然とし、さらには呆然とされるのではな  
いかと思う。だがこの二人の巨人が私の  
心に与える感銘においては、どこかに：  
…全面的にというのではないはもちろん、  
ある意味では全く正逆のものでありなが  
ら…：しかもそこには何かある共通的な  
ものが感じられるのである。

ではその共通的なものというのはいか  
かなるものであろうか。一口で言うとな  
れば、それは「現実に対する態度の確  
かさ」ということであり、さらにはその  
対策の確かさから来るものようである。  
今単にイデオロギーという面から見たな  
らば、この二人の人間は、全く正反対の  
極致といつてよいであろう。だから今、  
いわゆる報徳宗で固まっている人々と  
つては、毛沢東はいわゆる「赤」の典型  
として、最も嫌悪すべき人物として映ず  
るのであろうことは言うまでもないが、同  
時にまたいわゆる進歩的思想家を以て任  
じている人々には、尊徳などという人間  
は、封建的反動の巨魁であり、幕末日本

における最も悪質な金融家ということに  
もなるであろう。ところが人々のいうそ  
うした悪でそれぞれ分らぬわけでないに  
もかわらず、私には、何かそれ以上に  
これら二人の巨人は、いわば体臭的にど  
こか共通するものがあつて、私にはむし  
ろその方がより強く感じられてならない  
のである。

それはある意味から言えば、この二人  
の巨人の歩んだ道が、それぞれ農民の生  
活に徹した道であり、その魂は民族のも  
つ全農民の魂を代表している処から来る  
ものである。確かに尊徳と毛沢東とで  
は、その抱懐したイデオロギーは、文字  
通り正逆だと言つてよい。尊徳の立場は、  
封建政治体制を肯定して、それを万古不  
動のものと、その絶対的基盤のように、  
農民救済の方案としていわゆる「仕法」  
と称せられる対策を樹立したのである。

しかるに毛沢東は、それに対比すれば、  
まさにそうした封建的なるものの行き詰  
まりの極限的時点に出現して、これを根  
底的に破棄せんがため、マルキシズム  
の思想法式を用いたのである。尊徳の仕  
法なるものが、いかに固定的静止的なも  
のであつたかは、その仕法の雛形と称さ

れる農村救済の原型を樹立するにあたり、  
処によって180年の過去にさかのぼつ  
て、その地方の農業収穫を計算して、そ  
の収入の平均高を算出し、それをもつて  
歳入の基準として、歳出を引き締めるべ  
しとする方案を立てたのである。

1942年1月1日発行  
和2年1月1日発行  
令2年1月1日発行  
号4号  
1942年1月1日発行  
通卷194号  
目(ひじちようもく)  
飛耳長目(ひじちようもく)  
なる眼を以て分析し、ある意味ではそれ  
は、まさに180度の転回を施して振取  
せられたとも言えるほどである。たとえ  
ば従来の都市労働者を主体とする革命様  
式を、農民主体のそれに転換し、またゲ  
リラ戦法を以て、かつて無き高度の評価  
の下において、これを主要戦術としたる  
が如きその一端である。

東とは、まさに正逆の人物であつて、そ  
こにいささかたりとも共通性を感じ取る

などということとは断じて許すべからざる  
こととも言えるであろう。だが、それ  
もかかわらず私が、この二人の巨人から  
受ける感銘には、ほとんど優劣の言うべ  
きものがないことに深大である。私が33  
歳の歳に尊徳から受けた影響については  
すでに述べたが、しかしそうした影響は、  
決してその時、限りに終わらなかつた。  
否それのみか、その後もずっと持続して  
おり、それはある意味では、現在とても  
なお続いているとも言えることである。  
例えば私が揮毫などを頼まれた際、とも  
すれば書くところの「真理は現実の只中  
に在り」という前掲の言葉なども、この  
淵源を尋ねれば、結局尊徳によって「開  
眼」せられたものと言つてよい。

ところで私が最近毛沢東について多大  
の感銘を与えられている点も、ある意味  
では、彼の立場が、いわゆる学者先生的  
ではなくして、正しく「真理は現実の只  
中に在り」との立場に立ちつつ、中国五  
億の民衆の生活の改善と取組んでいる  
ところにあるのであつて、そこに私が、  
二宮尊徳との間に一脈の共通性を感じす  
るゆえんがある。

私が物心ついてから、今日まで読んで

きた書物の数と種類とは、必ずしも少な  
いとは思わぬが、しかも不思議なことに、  
尊徳の書物から受けた感じほども、生々  
しい深い感動を受けたものは、それ以前  
はもとより、それ以後も、最近毛沢東の  
書物の一端に触れるまで、かつてなかつ  
たことと言つてよい。かくして私にとつ  
ては、尊徳と毛沢東との間に、一切の理  
論を越えたある共通的なものが感じられ  
というほかない。すなわちそこには、い  
わゆるイデオロギーの相違を越えたある  
何ものかがあると言つてよい。すなわち  
私にとつては、この二人の巨人に対する  
親愛感は、この二人の巨人の持つイデオ  
ロギーの相違によつて妨げられない種類  
のものなのである。そしてそれは、これ  
ら二人の巨人が、その全精魂を傾けた対  
象が農民であり、おのおのその与えられ  
た時代と環境に即しつつ他の処のいわゆ  
る思想家たちと違つて、現実そのものの  
中から生きた眞望を洞察徹見している点  
に存するといふべきであろう。要するに  
私にとつては、この二人の巨人の人生に  
対する主的態度の上に動かし難い共通的  
なるものの存することを否定しがたいの  
である。

もちろんかく言うことは、今日の時代において、特に全民族が、他国の支配下に置かれておるとき、単なる「報徳宗に還れ！」などという時代を無視した素朴な言をなそうとしているのではないことは改めて言うまでもない。むしろ私の言いたい事は、我等の民族は、今やこの二人の巨人の間に生命の大流を開通せしむべきではないかということである。そのイデオロギー上の相違によつて、この二人の巨人を二者択一的に安易に取捨すべきではあるまいと思ふのである。ということは、私から考えてみれば、もし尊徳のような巨人が仮に毛沢東の生まれたような時代と国に生を享けたとしたら、多分毛沢東のような生き方をしたであろうし、また毛沢東のような人間が、尊徳のような時代と国に生まれたとしたら、たぶん尊徳に近い……決して同一とは言わぬが……道を歩いたのではないかと言ふ気がするからである。

もとより現実の歴史の歩みは、その一つ一つが絶対的であつて、一切の仮定を許されず、このような言葉は、一場の議論として許すべからざることだと言われれば、全くその通りであつて、一言もな

いわけである。がそれにもかかわらず、私は、このように正逆の外相を呈するこの二人の巨人のうちに、どこまでも否定しがたいある類同性の感じる事を否み難いのである。

私がこのようなことをここに記すのは、もとより世界史のもつ客観的展開の意義を無視しようとしているのでは決してない。だが我々日本民族が毛沢東というような現存の巨人に学ぶ場合、同族の先覚中、その体臭的類型において、最も類同性の多い尊徳というような巨人と相即せしめて、その摂取すべきを摂取するという態度は、必ずしもこれを生温いなどという態度は、必ずしもこれを一蹴すべきではないと思ふのである。

否、今日我々日本民族が隣邦の英傑毛沢東に学ぶには、いわばテーゼの時代に生きた同族の英傑尊徳のアンチテーゼ的な翻転的自己実現として解するという一面が必要ではないかと思ふのである。分裂症的病弊を深く内蔵している我らの民族にあつては、今日までのところ、いまだにこのような考え方と言うものは、全く一顧だも与えられないといつてよいようであるが、しかし私の内なる民族の血

の同感共鳴する真理は、いつの日にかその真実の顕彰される日が来るのではないかと思われる。

### あとがきに替えて

この論文は終戦後十年内外の頃のものである。現代の人々が読めば、あるいは驚く人もあるであろう。実は愚生も毛沢東については考えがたいではない。それは、確かに中国五億の民を養い列強の呪縛を払い、建国の一途を走った毛沢東の並々ならぬ手腕と指導力には驚嘆の外ない。がしかし、やはり共産党一局支配を樹立し、そのためには自国民の犠牲もやむなし、との勢いで虐殺のあつた非りはぬぐえない。その残滓が今も中国国内での人権無視の蛮行である。中国政府によるウイグル人弾圧の実態を示す内部文書が明らかになった。二〇〇万人を強制収容して思想改造を行つてゐるという。確かに今と中国建国時代とは、世界が異なると思ふが、素直に毛沢東の業績に諸手を挙げて賞賛することはしない。ところが尊徳さんの業績は今なお厳然と日本民族のDNAに根付いてゐるのではないかと思ふが如何？ 本年も印刷機が動くうちは本誌を作ります。よろしく。(25日二繁)

〒633-0003  
桜井市朝倉台東2-538-89  
電話 0744-4513422  
Email: hji3@ken.jp  
http://web1.ken.jp/syushn